

般若の空・慧と尸羅波羅蜜

佐々木 教悟

只今は研究室主任の桜部先生より懇切なるご紹介をいただきましたしまして大変恐縮しております。山口益先生の著作のなかに『大乘としての浄土』（昭和三十八年九月初版、理想社刊）というのがあります。その書物の中に「十住毘婆沙論の説示する浄土」という項目が設けられていて、そこに、

龍樹においては、浄土とは、不浄の止滅した境域であるが、その不浄とは、衆生の過悪と行業の過悪とで、その二事を転遮すれば、衆生の功德と行業の功德とがあり、その二功德が浄土であるという。

とのべておられます。そしてそこにいう衆生とは、行為の主体としての作者であり、その作者が行業すなわち作業を作るのであるとして、過悪・過咎・過患のおこるゆえんを追究されています。すなわち、いまあげた作者と作業となる能所が実体的にとらえられるとき、分別戲論が生じて衆生の過悪と行業の過悪になるのである。しかるにその能所なる世間的実用が縁起のことわりのあるべきありかたにおかれて戲論寂滅するとき、空性真如が証得されることになる。その空性真如とは、虚無体としてとらえられるようなものではなくて、空性↓空用↓空義という空展開の行程をもつべきものであるといっておられます。このことは、山口先生の他の著作、たとえば『世親の浄土論』（昭和四十一年三月初版、法蔵館刊）のなか（六十頁）でものべておられ、また教室における講義でもしばしば拝聴したことがあります。

す。おそらく先生の関心事となっていた事柄の一つとおもわれます。そのことは、大乘の佛道体系の上で浄土を位置づける重要な部門をなしたものとおもわれますが、わたくしは、とくに、衆生の過惡と行業の過惡の面で不浄が語られ、衆生の功德と行業の功德の面で清浄が語られること、すなわち、それらを領域としてあらわした穢土と、それに對しての浄土といわれることの意味に注目したいとおもいます。本日とりあげようとする般若の空思想において尸羅波羅蜜がどのように位置づけられるのかというテーマは、罪惡生死の凡夫といわれる衆生そのもののすがたと、衆生の行業である身口意三業の上での罪惡深重のすがたとの上から尸羅波羅蜜の有する意味を考察しようとするものであります。

菩薩の行である六波羅蜜のなかに、尸羅波羅蜜すなわち持戒波羅蜜があげられているのは、いったいいかなる意味をもつものであるかというに、『智度論』(卷四十六)には、つぎのように説かれています。すなわち、尸羅波羅蜜の有する意味を示すに十善業道(不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不綺語、不惡口、不兩舌、不貪欲、不瞋恚、不邪見)をもつてし、十善戒をもつてすべての戒を撰める總相戒となすというのであります。そして別相には無量の戒があるというのであります。ところで、世尊が十善業道のおしえを説きたもうたのは、菩薩をして一切の衆生に對する慈悲心を生ぜしめ、阿耨多羅三藐三菩提心を發起せしめて涅槃におもむかしめんがためであるとされています。このような目的のためには、何はともあれ、まず(持戒して衆生を悩まさず、諸苦を加えず、つねに無畏を施こす)というおしえが説かれなくてはならなかつたのでありましょう。(十善業道を根本となす)という立場は、すでにかの『十地經』の「離垢地」において、十波羅蜜のなかで戒波羅蜜がもつとも勝れているとする観点に立って、もっぱら十善業道が説かれ、さらにまた「遠行地」において(煩惱のあらゆる焰を鎮めること、此れが彼(菩薩)の持戒波羅蜜である)と説かれていることなどからも充分に首肯することができるのであります。

菩薩の持すべきものとされる十善業については、わたくしはかつて「戒学研究序説」(大谷大学研究年報 第三十集)なる小論のなかで考察したことがあります。それが菩薩をして涅槃に趣向せしめる因としての機能を具えているところから智者所讚戒ともよばれています。このことは、きわめて重要なことであるとかがええます。なぜであるかといえますに、それは諸佛・菩薩・辟支佛、および声聞がともに讚嘆する戒であるとされているからであります。そしてこれらのもろもろの智者によって讚嘆されるということのほかに、その戒を用いその戒を行わずることによって無上菩提へと向かわしめられるものであるとされているからであります。そしてまたその戒は、無漏戒あるいは不破不壊戒としての性質をそなえ実智慧をえしめるものであるともいわれています。智者所讚戒とか無漏戒とかいう語は、『小品般若』そのものに、すでに説かれているものですが(「一念品」、「六喻品」など)、『智度論』ではそれが強調されています。『智度論』が十善戒を総相戒となして、その内容を尸羅波羅蜜でもって示そうとしていることは、そこに大乘独特の立場をうちだそうとしたからでありましょう。その大乘独自の立場とは、声聞や辟支佛に対する菩薩としての立場であることはいうまでもありません。わたくしは、この点に関して、先に一言したところの行業の過惡に関連する罪業ということに注目してみたいとおもいます。『智度論』(卷三十九)をみると、舍利弗が世尊に対して、菩薩の身業不浄、口業不浄、意業不浄とはいかなるものかとお尋ねしたのに対して、世尊がつぎのようにのべておられるところがあります。

舍利弗は智慧第一といわれる佛弟子であるから、身口意の不浄業の何たるかは充分に知っているが、それは声聞法中において知っているということであって、菩薩の三業としては知るところがない。菩薩としては、たといい念たりとも声聞や辟支佛のごとき身口意業の差別相に取著するものがあってはならない。なぜであるかというに、菩薩は法空に住すべきものであるからである。声聞等は、身三、口四、意三の十不善道を知っておのおの身口意の罪業となすが、菩薩にあつては、身口意業の差別相に取著するのが身口意の罪業であるとされているのです。したがって、菩薩

が三業の相をみないとき、そこに三善業の根本があるというのです。このようにかんがえて、菩薩が罪不罪不可得の畢竟空に住して、しかも十善道を行じ、不取相心をもつて一切の善根を無上の佛道に回向するのが尸羅波羅蜜行ということになり、そこに戒が戒としての意味をまっとうするものと説かれるのであります。

しかしながら、このように、もしも罪不罪不可得にして畢竟空などといえば、悪取空の見到墮して、あるいは佛道を修めようとする意欲を失なうものがでてくるかもしれません。そこで注目されるのは、かの『十地経』の註釈である『十住毘婆沙論』の説であります。この『十住毘婆沙論』巻十六の「護戒品」をみると、そこには、なんらのよるべもたず、また救いもない六入の空聚もしくは空聚落にあって無量の苦悩を受ける衆生を憐愍して十善道を行ずることがすすめられています。そして菩薩がこのすすめにしたがって善道を行ずれば、すなわち持戒力が得られ、善業を起すことを知り、清浄の捨を行ずることを染染うことになり、深く清浄の戒を愛することになるといわれています。

このなか持戒力とは、一心清浄にして、十善道を具足せしめるはたらきを指し、清浄の戒とは、ただ善心をもって捨を行じ、もろもろの煩惱を雑まじえないうことを指し、それらがともに「離垢地」の離垢、すなわち、慳貪の垢、破戒の垢を離れることを意味していることが知られます。『十住毘婆沙論』の「護戒品」や、その直前の「大乘品」を読んでみますと、十善道のおしえの背景に、いわゆる六趣四生の群萌をうるおさんがためにといふ佛教の慈悲の思想があることに気付くのであります。そして十善道が声聞辟支佛地にいたらしめるおしえでありながら、さらに菩薩に示して佛地にいたらしめるおしえでもあることを説き明かすために、〈智者所讀の十善道〉（大乘品）という智者所讀行としての性格をもつことが説かれているのであります。さきに『智度論』の智者所讀戒について一言しましたが、ここでは智者所讀行として利他のために行ずることがのべられています。これを般若思想の上でいえば、般若空の慧から大悲への展開において有情が饒益せられることを意味します。それが無上正等菩提に向う行道であるとされています。さて、持戒力といわれるものが、さきほど申しましたように、一心清浄にして十善道を具足するものであるとすれ

ば、そこには能くおしえにしたがって行ずるところの、いわゆる佛子としての在り方がみられることになるであらうでしょう。また、そこには勤行精進すべきことをおしえられた菩薩の生活がみられることになるであらうでしょう。そして、これらはいずれも和合せる僧伽のすがたとして把握できるものなのであります。

かの義浄三蔵(六三五—七一一)が、あしかけ二十五年間にわたるインド・南海の求法の旅を終えて帰国し(六九五)、いちばん最初に手をつけた訳業は、洛陽の大福先寺の訳場における『根本薩婆多部律撰』の訳出であったといわれていますが、この書物は『別解脱經』の註釈にして、根本説一切有部という部派が伝持していたものであります。ところで、この律典は原始經典によりながらも、しかもひじょうに大乘に近い教学上の立場をとっているところの、きわめて注目すべき性格をもっていますが、この書物の巻一の初めのところに、いくつかの偈頌を引用し、それぞれの頌意を解説するところがあります。その偈頌の一つにつきのごときものがあげてあります。

諸佛の世に出現するは樂し、

微妙の正法を演説するは樂し、

僧伽の一心同見なるは樂し、

和合して俱に修し勇進するは樂し。

この偈頌は『法句經』の第一九四偈に相当するものですが、この偈の第三句および第四句に対する解説をみますと、それはまさしく前述の一心清浄と勤行精進の意味するものと相応するものであることが知られます。すなわち、第三句の一心同見については、それを一心同見と一心同事の二面から解釈し、一心同見とは、戒と見と威儀と正命とにおいて衆同じく遵うが故にといひ、また一心同事なれば、壞すべきこと難きを明かすが故にといひ、僧伽存立の条件ともいふべきものがあげられているのであります。これらのことは、一心清浄を基本とすることよつてのみ可能なことと申さなくてはなりません。ところで、わたくしがここでとくに注意したいとおもいますのは、第四句の和合し

て俱に修し勇進する云々といわれていることです。この句は日常つねにつかわれているような、きわめて平凡な文句のようですが、『律撰』によれば、和合して俱に修すと言うは、即ち是れ心を齊ひとしうして、淨尸羅を俱にするが故にと解説されています。ここにいう淨尸羅とは清淨なる戒のことです。すなわち、一心清淨の具現する生活を示したものといたしましょう。また勇進するとは、三学処(戒・定・慧)に於て、勤めて修行するが故にといい、あるいはまた勇心策勵して、諸煩惱をして究竟して尽くさしめるが故にといい、さらにまた、心勇決にして、所修の事に於て、進んで退くことなきが故にといつて、勤行精進といふことの具体相を明示しています。

以上が、ほぼ淨尸羅といふことをもつて僧伽の和合が語られているもので、きわめて注目すべき事柄であります。

ところで、まさしく大乘の菩薩が修すべきものとされる尸羅とはいかなるものであるかといひますに、さきにあげたところの『十住毘婆沙論』の「護戒品」に、ただ身口業のみを名づけて尸羅となすのではなく、修習、親近、樂行の三事もともに尸羅であることが説かれています。修習とは實際にわが身に修めること、親近とは善友(善知識)に尊敬をもつて親しみ近づくこと、樂行とはおしえをねがい行することですが、そのようにいへば、一切法はすべて尸羅と名づけなくてはならないことになり、とくに菩薩が修習することの意味がなくなるのではないかとの問いに対して、そこには、最勝の修習尸羅の存することが説かれています。

若し、我我所無く、諸戲論を遠離すれば、

一切に所得無し、是を上尸羅と名づく。

と説かれるのがそれです。それゆえに佛は尸羅を無我・無非我・無所作と名づけたもうとされているのであります。尸羅を行つてここにいたれば、一切法の無所得において上尸羅、すなわち、最勝の尸羅と名づけられるものへと向うことになるのであります。そこには、凡夫の尸羅より声聞・辟支佛の尸羅へ、さらに声聞・辟支佛の尸羅より菩薩の尸羅へという道程がかんがえられているのでありますが、これをわたくしは、尸羅↓淨尸羅↓上尸

羅という、尸羅の三相として解しております。しかしながら、最後の上尸羅は相というものの、有相としての相でないことはいうまでもありません。以上のことをいいかえれば、尸羅が般若の空・慧によって尸羅波羅蜜としての義を成ずることになるのであり、菩薩はその尸羅波羅蜜を行ずるのであるから、無相尸羅波羅蜜を行すべきものとされているのであります。そしてこれを「護戒品」の説くところにしたがって、さらに具体的に申すならば、諸賢聖の尸羅と諸菩薩最勝無上の尸羅ということになります。前者は、尸羅を以て自からを高くせず、人を下しめず、増上慢を起さず、此彼を分別せずとおしえられるものです。これに対して、後者は、諸相の分別を離れ、諸種の見を離れることを説くのはいうまでもありませんが、とくに佛・法・僧の三宝の種を断ぜざることをあげて、故らに法身を破せず、法性を分別せず、故らに法種の無為の相を断ぜずと説いていることは、『華嚴經』の「明法品」などの所説にてらして、とくに留意されなくてはならない点であろうかとおもわれます。いづれにしても、大乘戒としての十善業道は、このようにして、般若波羅蜜の思想の流れの上で、究極的には無相波羅蜜行としての菩薩行に、その真髓のあることが明らかにされているということが出来ます。

わたくしたちは、つね日ごろ、いとも簡単に持戒ということばをつかっていますが、上来のべたところからもわかりますように、尸羅の相をあまねく考察して尸羅波羅蜜義を領得することは、けだし容易なわざではないとおもわれます。『十住毘婆沙論』の「護戒品」には、無尽意菩薩尸羅品の中に説くが如し、といつて、菩薩の尸羅無尽なるが故に、如来の尸羅も亦無尽なりとのべ、我無く、我所無く、一切の所得を離れて諸戲論滅す、という戲論寂滅の境地が語られているのであります。

つぎに、初期大乘經典の一つにして、在家の居士である維摩が主役をとめることで有名な『維摩經』が『般若經』の空の思想を基調としていることは、あらためて申すまでもないことでありますが、この經典に持戒ということがど

のように説かれているか、その点についてすこしくふれてみたいとおもいます。

この經典の「佛国品」には、六波羅蜜が菩薩の佛国土として説かれています。その中、持戒に関する文はつぎのごとくなっています。〔大乘佛典〕7、一八頁以下の和訳による。〕

戒律という国土が、菩薩の佛国土である。そこには、あらゆる（善への）意欲をもつて十善業道をまもっている衆生が生まれる。（中略）

自らは戒律の条文をよくまもり、他人の過失はこれを口にしないことが、菩薩の佛国土にはかならない。その佛国土では、過失という名前さえ聞かれない。浄らかな十善業道こそは、菩薩の佛国土にはかならない。かの（菩薩が）さとりを得たときのその佛国土には、（十善業道の結果として）寿命をまっとうする者、大資産家となった者、異性ととの交わりの清浄な者、眞実を語るることによって身を飾った者、ことばのやわらかな者、家族のあいだに不和のない者、争いごとをまるく治めるのに巧みな者、ねたみのない者、怒る心のない者、正しく見る者——これらの衆生が生まれるであらう。

と、このようにのべて、国土の清浄と衆生の清浄と衆生の心の清浄とを説き、

それゆえに、若者よ、佛国土の清浄を欲する菩薩は、自己の心を治め浄めることにつとめるべきである。なんとすれば、どのように菩薩の心が浄らかであるかに従って、佛国土が清浄となるからである。

と説かれています。このように十善業道の有する徳用が強調せられて、自らの心を治めることが、いかに必要であるか、その点に焦点がしぼられているのでありますが、ここでわたくしがもっとも注意したいとおもう問題は、「弟子品」の長老優婆離と維摩居士との対話のなかにあります。そこでは、罪とは何か、汚れとは何かということがテーマとしてとりあげられています。そして佛教において、持戒あるいは持律といわれるのは、いかなることを意味しているのか、そのことが明確に示されています。そしてそこでは、佛弟子中、持律第一といわれた優婆離比丘でさえも、

なおも到達することができなかった境地が明らかにされているのであります。すなわち、あらゆる存在は夢や幻や電光の如きものとして、心の(妄想)分別によって生じたものである、そしてそのように知る者、それが持戒者あるいは持律者といわれるものであるというのであります。すべての人びとの心は汚れないことを本性とするものである。分別が汚れであり、自我ありとあやまってかんがえることが汚れであり、無我であることが本性である。ただ外形的に身口意の三業において悪をなさず善をおこなうことが持戒持律ではない。罪は内にもなく、外にもなく、内と外との以外に見られるものでもない。その罪や心に取り著く分別を離れよ。心が汚れることによって衆生は汚れ、心が浄められることによって衆生は浄らかになると、世尊は説かれているからであります。

ここにおいて、わたくしたちは、かの〈自浄其意〉の句を有する「七佛通誠偈」が、諸部派の伝持する波羅提木叉の末尾に付加せられてきたことの意味をくみとることができるようであります。この「七佛通誠偈」は、すでによく知られているように、『法句経』(第一八三偈)におさめられているものですが、いまは律典との関係以外に、諸種の経論に幅広く引用されている重要な偈頌であること、わけでも『智度論』(卷十八)や『十住毘婆沙論』(卷十三、略行品)に引用されていることの意義に注目したいとおもいます。『智度論』にあつては、般若の相義を明かすなか、随相門と対治門とを説くために、この偈と縁起法頌とが引用されています。『十住毘婆沙論』にあつては、無我行なる菩薩の所応行を説くために、この偈が引用されています。山口先生は〈自浄其意の根本義〉として、「略行品」の所明との関連において、しばしば心淨思想に言及されましたが、その〈心淨〉は「維摩經佛国品の原典的解釈」によって説明されたことができます。そして、もしもこの〈心淨〉を戸羅波羅蜜義のうえから解するならば、それはさきほどあげたところの〈一心清淨〉にほかならぬものとかんがえられるのであります。かの「略行品」にあつては、「七佛通誠偈」を引用して、〈一法有りて佛道を撰す。菩薩応に行ずべし。〉といい、その一法について、〈所謂善法の中に於いて一心に放逸せざるなり。〉と説かれています。したがって、これもさきあげたところの〈勤

行精進)にほかならぬものといえましょう。そして、このことは、世尊の最後の遺誠としてつたえられている(諸行は無常である。不放逸に努めよ。)というおしえに相応するものであります。

これをもって、わたくしの講義を終ることにいたします。ご静聴をいただきましてありがとうございます。

(付記)

この一文は、昭和五十五年一月十七日午後四時から図書館講堂でおこなった退任記念の最終講義に若干の補正をなしたものである。なお、この講義の中において、昨年十一月に中国社会科学学院の招待を受けて中国を訪問した際、上海でおこなわれた中国の佛教学者との座談会の模様を紹介した。それは中国にあつては、法師も居士も学者も、戒学に対する関心がきわめて深く、座談会の内容にも、菩薩行の実践、鑑真のつたえた戒律、印光の鼓吹した浄土教など、この講義の内容にも若干関係するところがあつたからである。しかしながら、いまは紙数の都合でその部分を割愛した。